

ねりま健育会病院 高橋 ゆみ(医事)

功 績 土曜の15時、法定の停電試験で主電源を落とす寸前の状況で、受付窓口を訪れた患者さんの異変を感じとった医事課担当が、関係部署に情報発信して、電源停止を止め、CTや電カルを稼働させ、医師診察や撮影検査の実施によって、脳梗塞発見に結び付けた功績。

推 薦 者 マネージングディレクター 山田寿朗

推 薦 理 由 当院の外来は、入院予定者の事前診断と退院後のフォロー外来の予約診療で診察枠を設定しており、原則として飛び込みの診療は受けていない。また、もともと土曜の午後は外来休診、特に今回は停電試験も開始直前で、管内全体が新患を受け付けるモードではなかったが、訪れた患者さんの緊急度を感じ取り、周囲に情報発信して臨時診察につなげた高橋の行動と患者さんに対する思い遣りは、愛情ある親身なホスピタリティの実践として他の範となるものであり、理事長賞に推薦いたしたい。

内 容

法定の停電試験は、毎年、外来休診となる土曜午後に日程を設定。電気関係の業者がスタンバイして、12時から大型機器のMRI、CTの電源を予めシャットダウン、15時に電カルサーバーをシャットダウンしたところで、館内の主電源を遮断。非常用電源の立ち上がり、赤コンセント回路の稼働を確認して、主電源復旧～全体稼働の巻き戻しという手順を予定していた。

試験当日、今まさに電カルサーバーの電源と館内主電源を落とそうという15時に、近隣にお住いの男性(90代・独居)がお嬢様付き添いで来院。受付窓口で、「顔面の感覚麻痺があり、診察してもらえないか」との訴えがあった。

既に窓口の電カル端末を始めとして院内の殆どの電源を落とし、停電開始の用意を促す館内放送も流れて全館スタンバイの状況であったが、異変を感じた医事科受付の高橋は、外来看護主任に連絡。看護主任は、すぐに男性の症状をヒアリングして脳梗塞の兆しを疑い、酒向院長につないだ。高橋は、停電試験の事務局に、臨時の診察が入るかもしれないと連絡。事務局は、電カルサーバーのシャットダウンを寸前で停止し、放射線科にも検査機器の電源再立上げが可能か打診した。

酒向院長から、「すぐに診察しましょう。撮影検査の用意をしてください。結果次第で救急搬送」との指示が出され、CTは15分で再立上げが間に合ったため、男性の頭部撮影を実施した。

幸い、緊急処置を要するような頭部出血や明確な梗塞は認められず、仮に問題があったとしても保存治療の範囲内と判断されたため、当日は一旦、麻痺改善も含めた薬剤投与の上で自宅に戻って頂いた。

月曜日に改めてMRIで再精査をした結果、小さなラクナ脳梗塞と、軽度の麻痺が認められた。早期発見・保存治療で足りる軽度のものであったため、当院に直接入院の上、リハビリテーションによるADL回復をはかることとなった。

当院近隣にお住まいされているながら、今までリハビリテーションには縁がなく、当院受診も初めての患者さんだったが、「ここで診てもらえて助かった」と感謝を頂いた。